

# 博士論文の要旨

中国における大学評価に関する研究  
-大学評価制度の成立及び実態の考察を中心に-

広島大学大学院教育学研究科  
教育人間科学専攻（高等教育分野）  
林師敏

中国では、1980年代には、高等教育の分野では、様々な改革や改善の取組みが行われた。中国政府による大学の管理・コントロールの手法として、大学評価という取組みがその時代に導入されたものである。それ以降、大学評価は中国高等教育の文脈において発展しながら変容してきたが、大学教育の質保証に対してメディアや社会が関心を示し始めたのは、2003年に実施された第1ラウンド学士課程教育評価からであった。この時期はちょうど中国高等教育の規模拡大が続けられた時期であるため、高等教育の規模拡大につれ質の低下や教育的資源の不足などの課題が指摘されていた。また、教育部による大学評価に対応するために、大学の不正行為や、教育活動の偽造の書類などのマイナスの面が新聞紙上で報道されていた。大学の質の低下、大学評価に対する大学の不正な行為など、大学の課題と大学評価それ自身に対する問題がしばしば指摘されていた。

他方、高等教育における教育活動の国際化は世界的なトレンドとなっている。国を超える留学生と教員の移動、単位取得の認定などの教育の国際交流は盛んになってきた。それとともに高等教育の質保証（大学評価）は重視されている。アメリカではア krediteーション団体によるア krediteーション的評価が行われている。ヨーロッパでは、とくに、ボローニャ・プロセスがヨーロッパの高等教育分野の質保証の整備を加速している。大学評価は欧米のみならず、東アジアや東南アジアなどの国々へ普及してきた。例えば、日本、韓国やベトナムなども大学評価の整備を行ってきた。

こうした背景を踏まえ、中国の大学評価制度はいかに形成されてきたか、大学の整備への促しを主な目標とする大学評価が指摘されるのはなぜか、こういう大学評価制度に基づいた大学評価の取組みはいかなる課題を残すのかが関心の所在である。

以上に述べてきた事柄を踏まえて、本研究の目的は、中国の大学評価制度を考察の対象とし、その形成・変容の実態を明らかにするとともに、大学評価制度の課題やその改善策を提示することである。

そのため、本研究は中国大学評価制度の評価目的、評価主体、評価指標と評価方法に焦点を立てて、中国大学評価の原点である導入時期の大学評価の経緯、評価制度の成立及び変容を検討し、中国の大学評価制度の特質を体系的に考察することである。大学評価制度は、中国国内環境の激変と国際的な高等教育や大学評価を取り巻く動向の影響を受けつつ、大学評価制度を構成する側面がいかに導入、成立と変容しているかが、単に表面上で中国の大学評価制度の特質を捉えるのみならず、既存評価システムの見直し、新たな評価システムの導入の理解にも意味があると考えられる。

本研究で扱う「中国における大学評価に関する研究-大学評価制度の成立と実態を中心に-」というテーマは、これまで先行研究で言及されつつも、まだ議論が深められていない研究課題である。中国の大学評価における目的・主体・指標・方法に焦点を当てて評価制度内の変遷経

緯の研究は、まだ深化されていない側面にある。また、第2ラウンド評価の進行中に当たり、現行の評価はいかなる課題を生じるか、それに対する研究は評価制度の改善に役立つが、先行研究は同様に評価実態の研究が不足していることにある。

そこで本研究では、これらの先行研究の限界を踏まえ、以下の研究課題を設定した。

第一は、中国の大学評価制度と評価目的、評価主体、評価指標、評価方法との関連はどのように歴史的に捉えられるか。

第二は、現行の中国の大学評価は、大学にいかなるインパクトを与えているか。また、それはなぜか。

本研究は大きく2つに分かれ、第一部の「中国の大学評価制度の成立と変容」、及び第二部の「大学評価の課題」である。

第一部の「中国の大学評価制度の成立と変容」に関して、評価制度を構成する評価理念、評価主体、評価方法、評価指標が特定時期の研究ないし分割された研究があるものの、その制度的構造として、評価制度を構成するこれらの体系的な研究が管見の限り見当たらない。金子(2000)の大学評価の形態における目的、主体と基準について、評価指標と評価方法は大学評価制度の重要な構成要素であり、評価基準は国が定められている事柄のため、簡単に変わることなく、そのため、評価指標と評価方法を評価基準に入れ替え、その制度的構造として、評価制度を構成する目的、主体、指標、方法といった4つの側面から、中国的大学評価制度の特質と課題を捉えることに意味深い内容だと考えられる。

第二部は「中国の大学評価の課題」研究は、新たな評価進行中にあたり、一部の大学が評価を受けたことと全国の評価報告書の非公開という現状を踏まえ、本研究はケース・スタディを用いて、評価を受けた大学への考察により、新たな評価が大学にインパクトの有無、どのぐらいの強み、あるいは弱みがあるかを明らかにした上で、評価制度改善への示唆を提示する。その際に、インパクトは主に教育資源配置、教育質管理の専門化、教育活動、組織の変化（内部質保証の整備）といった4つの側面に限定している。なお、新たな評価制度は内部質保証の整備という点の提唱により、組織の変化に関する考察は評価を受けた大学が内部質保証を中心にする。分析は全学レベルと学部・専攻レベルの二重視座から、全学における新たな評価を受けた前後の大学教育改革、大学管理者層と学部レベルの教員のインタビュー調査を通じて、それらのインパクトなどを明らかにする。

#### (1) 第一部の研究対象と方法

本研究が着目するのは、中国の大学評価の制度的構造である。ここでいう「制度的構造」とは、主に大学評価の目的、評価基準、評価指標、評価方法をさす。これらは、大学評価制度の主要な構成要素でありながら、政府による政策や意思決定の伝達と大学からの反応を示せるという関係性にある。即ち、政府と大学の間にあるこうした制度的構造という上下関係に目を

向けることによって、研究課題の第一が明らかになる。

大学評価の導入、評価制度の成立と変容に関する研究資料は、政府と教育部による教育関係法令、高等教育政策、評価政策、教育部関係者による書面資料と会議の講演、大学評価に関する実施大綱、評価基準、実施要項などの公的資料である。

## (2) 第二部の研究対象と方法

第五章は、第四章の分析結果に基づいて、現在進行中の第2ラウンド評価の実態に着目し、ケース・スタディを通じて深く考察する。加えて、第2ラウンド評価は2013～2018年実施される予定のため、現在はその全体評価データがない。その上で、個々の大学の自己評価報告書のみならず、外部評価報告書も公開されていないので、大学評価の課題を巡ってケース・スタディが有効な手法だと考えられる。

そのため、本研究は中国高等教育を一般的に考察することなく、異なったレベルに応じて大学事例を選択し、研究を行う。この事例研究を通じて、代表されるそれぞれの大学層の事態などを解明することを図る。

また、大学評価に関するインタビュー調査は誰を対象とするかが重要なポイントである。インタビュー対象の選択は研究の内容に直接関係している。本研究は、大学評価に担当する大学レベルの「教務処」担当者と各学部レベルの教員（実際の教育授業を担当）を対象とした。「教務処」担当者は全学レベルの大学教育の質保証や大学評価の行動などを担当し、管理者層の視座から情報を提供できる。教員は学部の教員として、実際の大学教育、専攻、科目やそれ自身の授業の情報を教員の視座から提供できる。

本インタビューは2016年10月23日から12月6日にかけて行われた。11月23日から26日までC大学、11月28日から12月2日までB大学、12月5日から8日までA大学、というふう

に中国のD省にまわしてインタビュー調査を行った。

本研究の構成は以下の通りである。

第一章では、現代中国の大学評価はいかに導入され、当時の中国高等教育にいかなる効果をもたらしてきたかについて、1980年代の大学評価の導入の背景、大学評価に関する議論や政策の作成過程及びその評価活動の展開、1980年代の中国大学評価の特徴、効果と問題点を明らかにする。

第二章では、大学評価の制度的構造における評価理念、評価主体、評価指標と評価方法は大学評価の重要な構成要素であり、そこで本章では中国における大学評価の発足から2000年代の制度化までの流れを、これら4つの側面に着目し、大学評価制度がいかに形成されてきたかを検討する。

第三章では、中国の大学評価制度がなぜ変容、いかなる変更を行ったかを考察する上で、中国の新たな評価は既存システムの見直しと新たな仕組みの導入はいかに行われているかを理解

できることになる。また、本研究は近年大きく変化しつつある国際的な大学評価のトレンドにより、中国が内発的発展という改革理念に基づき、外部評価と内部質保証の位置づけや課題を検討する。

第四章では、『中国の学士課程教育評価に関する報告書（2003-2008）』のデータに加え、教育部（2004）が公表した「学士課程教育評価に関する方案（試行）」（中国語：「普通高等学校本科教学工作水平評価方案（試行）」）における指標と採点基準を一次資料として、学士課程教育評価における全体レベルと基準レベルの結果考察、代表的な中項目の検討、まとめと課題、を考察する。

第五章では、事例大学の「本科教学質量報告」、評価実践の報道、インタビュー内容をもとに、大学評価（第2ラウンド）は中国の大学にいかなる影響や効果をもたらしてきたかを考察する。

終章では、これまでの各章の検討で見出された結果をまとめながら、再び問題関心に立ち返り、この2つの問いについて考えてみる。

課題一の中国の大学評価制度の導入、成立と変容について、中国では大学評価は新しい事柄として、1980年代半ばに導入された後、模索の紆余曲折をし、2003年に制度化、2013年以降評価制度の変容を辿り着いた。先行研究の通り、「統一的な指標」、「画一化の基準」、「政府による行政的評価」などの特質をまとめた。しかし、こうした評価制度を構成する諸側面、つまり、上述の特徴を示している評価目的、評価指標、評価主体と評価手法はいかに導入から変容までの経緯、また、それぞれの側面は当時の中国国内外環境との関係性の検討が深く議論しないとあった課題がある。本研究は、第一・二・三章において、中国の大学評価制度の導入・成立・変容について考察・分析してきた。本研究は各章を通じてこうした課題を明らかにした。

最後に、上述した中国の大学評価の導入、制度化・変容の考察にあたり、内発性（独自性）と外発性（舶来品や大学評価の国際的動向の影響）の相互受容、争いという特徴がみとれる。ここでの内発性は大学評価における中国ならでの事柄の開発・研究を進めている様子がみられる。また、中国高等教育にとって、大学評価はもともと舶来品であった。導入の際から、舶来品としての大学評価が中国高等教育の文脈で受け入れられながら、「中国の特色ある」大学評価を進んできた。特に、評価目的で中国高等教育の改革に基づいて教育への促進という目的の実施、評価指標で中国の学士課程教育改革の重点である専攻調整・整備、カリキュラム改革、教科書の更新などの受け止め、評価方法で卒業論文の点検・チェックや授業現場の参加などは、中国的な大学評価を示している一側面と言える。そのため、本研究における評価目的・主体・指標と方法の考察を通して、この4つの側面で中国的な大学評価の特色の形成が明らかになった。

課題二の現行の大学評価のインパクトについて、本研究は中国の事例に基づいて大学評価という国際的な課題を明らかにし、従来の研究の到達点を更新し、今までの評価制度との比較や

現在の急速な変容、数値評価からの脱却、目的適合性に基づく評価の実施、評価に関する大学情報の公開など、現在中国の高等教育質保証の整備に関する最新の動向に関する知見を提供している。また、大学評価はまだ進行中であるが、大学へのインパクトに関する考察分析も、レベル別の大学の考察を通じて、新たな評価は大学による内部質保証の整備のみに促進してきたことが明らかになった。

本研究の新規性は、第1ラウンド評価を中心とした先行研究の到達点を更新し、「中国の大学評価制度」を歴史的に考察するのを通じて、中国の大学評価制度研究に独創的な知見を提供している点にある。一つは、第一章に示す通り、そもそもの中国の大学評価はいかに導入され・制度化されたかに関する知見を提供している。もう一つは、第三章に示す通り、中国の大学評価制度は新たな評価制度への変容経緯と新・旧評価制度の比較分析により、新たな評価制度に関する最新の知見を提供している。また、第五章は評価を受けた大学に焦点を当てて、新たな評価制度に基づく評価活動がいかなるインパクトを大学に及ぼしているかに関する実証研究の知見を提供している。このような研究から得られた知見は、中国の大学評価制度の改善に極めて有益となり、中国の大学評価に関する研究のさらなる深化にも役立つと考えられる。

評価制度の改善へのインプリケーションについて、目的に適合的な新たな評価は、大学独自の教育目標とポジショニングに沿って実施されている。事例の3つの大学とも、大学教育を「点検」はしているが、目的に適合した「評価」行動ないし促進の取組みがみられない。事例大学に関係する公文書や改革記録などには新たな評価に基づく学内の改革に関係した情報がない。また、インタビューした教務処関係者は目的に適合した新たな評価に慎重なコメントをしている。さらに、年度刊行の「大学教育の質に関する年次報告書」でも、新たな評価に基づく学内の改革に関係した情報が少ない。ここまでの考察をまとめると、新たな評価イコール「点検」機能であり、「評価」機能とはいえない。個々の大学の文脈に基づいて、有効な評価をした上で、その長所の発揮、課題の解決というプロセスを通じて、個々の大学の目的に従ってさらなる発展・成長へのつながりをする事柄が不足している。そのため、本当の大学の目的に適合した評価を行うために、新たな評価手法による評価結果、コメント、発見した課題をフィードバックさせ、当該大学のこれからの大学教育改革に連携させることは大事な課題となる。また、教育政策や各種の教育プロジェクトに、いかに新たな評価手法による評価結果を受け止め、連携していくかが、新たな評価の目的適合性に従う機能の発揮に役立つに違いない。

評価指標における教員の授業意欲関係指標内容の修正が必要である。3つの事例により、教員らは教員の授業意欲の高さが教育の質ないし授業の質に繋がる要素だと強く強調している。大学は教育の質保証をしようとするならば、個々の教員による授業意欲を引き出すことがプラスの事柄である。教員は大学教育の主体となり、大学教育と学生との間の仲介役としての存在であり、授業意欲の強さは学生の学習への積極性を引き出し、学習を促進している。しかし、

実際の3つの事例のいずれの大学も、「アメとムチ」の方法で教員を管理・コントロールしている。既存の内部質保証の措置も限定的な機能しか果たしていない。単に教員が授業をして授業評価すればいい、授業の質が良いかどうかに対する対策などは形式的なものになってしまった。これに対して、第5章で述べている通り、インタビューを受けた教員の多くは、不満を示している。そのため、新たな評価は内部質保証の構築と有効性の評価を重視し、目的適合性に沿って評価するために、具体的な評価内容として、評価指標に教員の授業の様式ないし、授業意欲に関係する項目や内容の策定が重要なポイントであろう。

本研究第5章のケース・スタディを通して、評価の前後の1、2年間をみても、学部・専攻レベルの教員らに目に見える変化がない。ただし、内部質保証の方面において、評価による新たな促進がみえた。新たな評価制度は実態としてレベル別の大学の変化や大学へのインパクトが限定されているに加えて、評価結果をいかに利用するか大学管理者層次第だという回答がインタビューの半分以上を占めている。しかし、実際の評価後における3大学の取組みを分析しても、評価に対応する行動や規範整備などが見られない。大学にとって、新たな評価はただ「合格」を取得するための評価活動であり、インタビューにおける教務処関係者と教員らが言った通り、政府による各種の教育プロジェクトなどのほうが、莫大の資金や名声といったメリットを持っており、質の高い人材の招聘、対応の教育改革が速やかに行われている。しかし、新たな評価はただの行動であり、しかも5年一回の周期性がある。大学にとって、短期・長期の利害関係を考慮し、自身にもっともメリッドがある事柄ないし優先的な事柄を扱うわけである。即ち、新たな評価は目的に適合した大学評価の機能が弱まっている。そのため、新たな大学評価制度を教育改革に関するプロジェクトや教育政策と連携させるならば、新たな評価が重視されるようになる。例えば、「双一流」という発足したばかりの国レベルのプロジェクトでは、新たな評価を受けた評価結果を参考すれば、目的適合性に相応しい新たな評価の機能が引き出され、大学に個性的発展が促されている。

中国の大学評価研究へのインプリケーションについて、本研究は大学評価制度研究、そして大学評価制度研究の評価目的、評価主体、評価指標と評価方法の4つの側面が実態における大学へのインパクトを検討するという意味で一貫性を持っている。評価制度研究に関しては、評価目的、評価指標、評価主体と評価方法という側面に絞っている詳細的な制度分析が、中国の大学評価制度研究に豊かな研究視座を提供し、研究対象と研究内容を深めることに貢献できると思われる。

また、新たな評価のインパクトに関する研究が遅れている現状において、本研究は中国高等教育の三つのレベルに基づいて、レベル別の大学を対象とし、評価の前とその後における学内の教育改革などを分析することに加え、大学の管理者層と教員達へのインタビューという実証研究を行なっていることを通じて、新たな評価の大学へのインパクトを明らかにした。こうし

た研究作業は、中国の大学評価研究における実態研究の少ない現状に研究のさらなる拡大と深化に示唆を提供できたと思われる。

以上、中国の大学評価制度とりわけ評価制度における目的、主体、指標と方法について、歴史的分析を踏まえ、制度的考察と実態的検討を加えてきた。言うまでもなく、言及しえた事柄は部分的なものに留まり、触れることのできなかつた点も少なくない。最後に、「理論的分析枠組みによる研究の深化」と「より広範な実態調査研究の実施」という2つの課題を提起した。